

2021年5月NHK中部地方放送番組審議会

5月のNHK中部地方放送番組審議会は、20日(木)、NHK名古屋拠点放送局(ウェブ開催)において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ショートストーリーズ「#29 思い繕う かけつぎ職人～岐阜 美濃加茂～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告の説明、ならびに「2020年度中部地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」についての報告と番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	松田 裕子	(三重大学学長補佐)
副委員長	坂田 守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
委員	稲垣 貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤 英俊	(名城大学特任教授)
	岡安 大助	(中日新聞社取締役)
	榊原 陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
	玉井 博祐	(能楽師／玉井屋本舗社長)
	成島 洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学SDGs推進センター長)
	廣田 憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井 香一	(東邦ガス(株)代表取締役会長)

(主な発言)

<ショートストーリーズ「#29 思い繕う かけつぎ職人～岐阜 美濃加茂～」
(総合 5月1日(土)放送)について>

- 親子の間で受け継がれる職人の技と心を、明るく落ち着いた雰囲気描いており、家族で一緒に楽しめる内容だった。単に継承するだけでなく、さらなる研究を重ねて技術を発展させようとする娘の佳子さんの心意気は非常に印象的だった。かけつぎはそれほど広くは知られていないと思うが、そのような中でも、次世代の職人である佳子さんがインターネットを活用し、思い入れのある服を直したい人と直接結び付いている話はとても参考になった。店を訪れた人々の服についてのエピソードや、修復の工程、よみがえった服を試着する様子などが一連の流れとしてスムーズに構成されていてよかった。佳子さんがかけつぎ職人を志した理由や、多忙な中でも親の責任を果

たす姿に共感でき、父親の鉄舟さんが娘の晴れ舞台のために一度は断念したテーラーとして再び腕を振るってスーツを仕立てた話には心が温まった。鉄舟さんが37歳で初めてかけつぎに出会い、その道で身を立てていこうと決意した経緯も加わると、かけつぎにかけける思いがより伝わったのではないかと感じた。背広を直しに来た人を「サラリーマンふうの男性」と表現していたが、後日、自宅でも取材をしていたのであいまいな表現にする必要があったのか疑問に感じた。また、かけつぎの原理について実際の映像だけでは理解しづらくアニメーションや図などを使って、どのように織り込まれているのかを説明してほしいと思った。大使館でのイベントでかけつぎを披露したとのことだったが、日本にしかない技術なのか、日本で活躍する職人はどれくらいいるのかなども気になったので、かけつぎ自体への理解がもう少し深まる情報もあるとよかった。

- 見終わったあと温かい気持ちになる番組だった。ただ、技術の継承という意味では、かけつぎ以外にもさまざまな職業で親子の物語があるのではないかと考えた。かけつぎとはどのような技術なのか、詳しく教えてほしいと思った。繊維の構造をまとめた組織図をどのように使って修復するのかや、これまでの技術では修復の難しかった生地まで直せるようになった理由など、魔法のように直していく過程がもう少し分かれるとよかった。小さな物語というテーマに沿って、仕事以外の私生活のエピソードも紹介していたと思うが、それよりも、かけつぎのやり方や作業の様子を見せたほうがおもしろかったのではないかと考えた。また、依頼される服は大切なスーツなど、修復にそれなりのお金をかけているとは思いますが、どれくらいの費用が必要なのか知りたかった。直接的に値段を言わなくても、さりげなく値段が分かる物を映り込ませるなどすれば納得感があったのではないかと考えた。父親と娘がかけつぎ職人になった理由や、どのように技を受け継いできたのかについては、しっかりと描かれており、非常に楽しく見られた。
- 以前、同じような番組を見たことがあり既視感があったものの、父親がテーラーからかけつぎ職人になり、娘へと受け継がれていく様子が家族の歴史とともに描かれていておもしろかった。華々しさは無かったが、つい見入ってしまった。特に、魔法のように生地を直すかけつぎという技術が伝承されているところがおもしろかった。また、海外のイベントで評価されたという話は、東海地区の店として誇らしく感じたし、興味深かった。かけつぎを通じて、修復を依頼する人、修復をする人、双方の人生が映し出されているようで、仕事を通じて人に喜ばれる姿を見ることができてよかった。
- セピア色のオープニング映像からは懐かしく温かな雰囲気が伝わり、ディレクターの語りも素朴で誠実な印象だった。魔法のように服が直っていく過程は感動的で、以前、かけつぎによって友人のコートが美しく直って驚いた自身の体験を思い出した。1ミリの間に4本の糸を通す描写から、かけつぎは繊細で集中力がなければできない技

だとよく分かり、1センチ織り込むのに約40分かかるとにも驚いた。スーツの見返しからかけつぎに使う生地を切り取っていたが、切り取った部分もきれいに修復されていることまで伝えており、視聴者の「あの部分はどうなってしまったのか」という疑問にも答えていたと思う。仕上がり具合からは、本当に細やかなところにまで心遣いが行き届いていることが伝わり、見事によみがえった服に感動する家族の姿に思わず涙が出そうになった。父親と娘が、ふだんはなかなかことばにできない尊敬や感謝の気持ちをお互いに伝えあっており、親子にとっても番組がよい機会になったのではないか。見ている側も「こんな親子になりたい」「こんな仕事がしたい」という爽やかな気持ちになれた。父親の膨大な生地の研究が娘の道しるべになったという話からは、手取り足取り教えるのではなく、自分で見て学べという職人かたぎの姿勢が伝わってきた。情報技術の発展によって、このような誠実で努力を惜しまない職人の技が、より多くの人役に立つようになったことは素晴らしいと思う。服が直って喜ぶ家族の姿は、「人々を笑顔にする魔法のかけつぎ」というナレーションのとおりだと思った。料金が気になって思わず調べてしまうほどに印象深くとてもよい番組だった。

- 職人親子の関係、依頼に来た人の背景、かけつぎの技術という3つの要素のバランスが大変よく、多くを語っているわけでもないのに、スムーズにストーリーが繋がっていたと思う。タイトルに合った内容であり、音楽や語りのトーンなど全体を通じてすっきりとデザインされていて好感を持った。取材がきっかけとなり、親子がふだんはなかなか言えない本音の部分までも語っている姿はほほえましく、対面ではそこまではお互い言わないだろうと思わせるところが、これもまたよい親子の関係なのだろうと感じた。依頼した人の背景まで拾い上げ、自宅にも訪れるなど、丁寧に取材している印象を受けた。父親の生地研究の膨大さを示す映像と、娘もそれを超える努力をしてきたからこそ今があることを示唆する内容がきちんと繋がっていて、とてもよい映像の作り方だと思った。料金を調べたが安くはない金額だったため、やはり依頼する人はその服に非常に深い思い入れがあるのだと思った。ファストファッションが広まる中で、物を大切にすることや、物の背景にある自分のストーリーを改めて見つめ直すきっかけになる番組だと思った。
- 一般的にはあまり知られていない、かけつぎをする職人親子ということで珍しさを感じた。娘の佳子さんは、高校生の時に自分の不注意で傷めてしまった友人のズボンを父親が見事に直してくれたことに感動し、かけつぎのすごさを実感して受け継ごうと思った気持ちがよく分かった。また、研究熱心な父親に弟子入りし、今では日本を代表して海外のイベントで技を披露するほどの職人になっているとのことだった。かけつぎで服を直してもらった経験はあるが、その工程のきめ細かさは想像以上だった。日本人ならではの手先の器用さや、細かな配慮、そして誇るべき技術の継承を今後も

広く取り上げていってほしい。別の番組で、長年使える物か見定めて買うことや、再使用やリサイクルなどを意識して資源をむだにしないよう心がけるべき時代だと伝えていて、この番組も地球温暖化防止につながる内容だったように感じた。

- 内容がとても濃く、一気に見てしまった。職人としての親から子への技術の継承、父親の背中を見て育ってきたという親子の物語、店に持ち込まれる衣類にまつわる持ち主の物語がとても丁寧に描かれていた。持ち主の物語の紹介では、昔の写真なども活用しながら伝えていてよかった。かけつぎの技術が魔法のようで本当にすばらしく、番組ではとても丁寧に撮影していたとは思いますが、それでもまだ「どうなっているのだろう」と思えるほどの技術だった。また、父親が研究して作成していた組織図がとてもきれいだった。地域のお店が世界に向けて発信し、遠方からも依頼があることを伝えていたのもとてもよかったと思う。全体的にとってもよくまとまっており、「ショートストーリーズ」というタイトルにふさわしい、たくさんの要素が濃縮された番組だった。

- 非常にすてきな番組だった。お気に入りの衣服を修復するかけつぎは非常によい取り組みだと思う。直した場所が分からないように修復することで、物に込められた思いをよみがえらせるということが伝わるよい内容だった。物の機能を重視する考え方から、物に込められた意味や思い出を重視する方向へ価値観が変化しつつある今、かけつぎに注目したのはすごくよかったと思う。こういった職人を敬える社会になっていってほしいと強く感じた。こうしたことに光を当て、社会における新しい価値観の広がりを加速させていくこともメディアの大きな役割の一つなので、その観点からもすごくよい番組だったと思う。いろいろな切り口で物語を紹介している点も印象的だった。仲介業者を挟むビジネスモデルから、顧客の顔や声に直接触れられる形式に進化していく話には、大量生産・大量消費社会からの脱却という観点がうまく盛り込まれていたと思う。かけつぎの紹介だけにとどまらず、物自体やそれに込められた人々の思いを大事にしてきた職人の、父親と娘の物語が織り交ぜられているところもよかった。父親が蓄積してきた技術と娘の新たな取り組みが組み合わせられることで困難な修復を成し遂げ、顧客の思い出をよみがえらせた場面は非常にスムーズな流れで、分かりやすかった。コンセプトとしても、異なるものを組み合わせることで1枚の布にしていくというイメージと合うストーリーになっていて、すごく感動的だった。

- さまざまな物語をうまく織り交ぜて制作していたと思う。注文から納品までのかけつぎの流れ、作業工程がイメージできる番組だった。年間2,000点以上受注しても、収入としてはそれほど多くはないと思うが、40年間で10万もの人々の思いとつながっていると想像するだけで豊かな気持ちになれた。職人のかけつぎへの思いだけで

はなく、客の物語もよく伝えていたと思う。職場と家庭が同じという環境で、常に神経を張り詰めて働くことは、気持ちの切り替えが難しいのではないかと思ったが、毎週末、父親が古民家で自分の時間を過ごす姿を見て、この時間が妻や娘の息抜きにもなっているのではないかと感じた。かけつぎを何度か利用したことがあったので、きれいに直ったときの客の思いに共感でき、非常によい番組だと感じた。

- 根底に親子の信頼関係、尊敬や感謝の念があって、ほっこりした雰囲気、ほっとさせられる番組だった。父親と娘が交互に登場し、依頼者のエピソードと縦糸横糸をなすよう上手に構成されていて、伝えたいことがうまく届いていたと思う。出来上がりに喜ぶ依頼者の姿からは、日常におけるさまざまな行為の動機には、人に喜んでもらいたいという気持ちがあると感じ、仕事に取り組む原点も再認識できた。依頼者の喜ぶ姿を取材するために遠方まで出向いた効果もよく出ていたと思う。父親が作った組織図は織物の奥深さを見事に表現していた。日本文化を紹介するニューヨークのイベントにかけつぎ職人代表として出ていたが、彼女の技量が全体の中でどれくらいの位置にあるのか、どのような経緯で選ばれたのか、どのような技を披露し、その反響はどうだったのかなど、もっと詳しく知りたかった。父親が古民家で過ごすシーンは少し余分だと感じた。親子の関係がメインテーマではないが「通奏低音」となっていて、ほっこりできるよくできた番組だったと思う。
- タイトルが非常によく、いくつもの物語を糸のように織り込み、うまく織り交ぜて出来上がったかのようなすてきな番組で、心が温まった。父親と娘はカメラを意識しすぎることなく、自然な会話ができていると思った。制作者と親子の間に信頼関係ができていると感じられ、何度も通うなど丁寧に取材された番組だと思った。また全体として、親子の仕事や人柄にほれ込んで制作された番組だと感じた。かけつぎの伝統的な技術は魔法のようだと表現していたが、仕上がりを見た客の表情やことば、依頼が全国から来ていることなどを通じて、しっかりとした評価がついてきていることを描いており、本当に高度な技術であることが理解できた。あれほど精緻な仕事を見てみると、利益が出るのかと心配になった。今の社会には物があふれ、すぐに買い替えることが普通になってしまっているが、直して大事に使い続けることの大切さに心を動かされた。番組をきっかけに、かけつぎが広く知られ、仕事の依頼や職人を目指す人が少しでも増えれば、公共放送として意味のある番組になると思う。ナレーションは無理に盛り上げたりはせず、脚色するような演出もなく、かけつぎという本当に見事な技術を等身大に描いており、とても印象のよい番組だった。

(NHK側)

かけつぎの技術をもっと紹介したいと思って交渉したがすべてを見せ

るのは難しいということだった。かけつぎの値段は業者によって大きな差があり、紹介することで宣伝になってしまう可能性もあるため、今回は伝えなかった。ただ、これだけ多くの人たちが気になるのであれば、宣伝にならず情報として伝えるにはどのような手法があったのかさらに考えてもよかったのではないかと思った。職人の親子からは「番組を通して自分たちの仕事がどのように届いているのか知ることができ、よい経験になった」と言ってくれたので、かけつぎを続けていく原動力になれたのではないかと思う。視聴者からの反響としては、SDGsに触れているものが多数あり、物をどんどん捨てる風潮に対する否定的なメッセージを感じたという意見もかなりあった。今回いただいた指摘を参考に、今後とも取り組んでいきたいと思う。

<放送番組一般について>

- 4月22日(木)の所さん！大変ですよ「世界中で争奪戦！？狂乱のウイスキーバブル」を見た。日本産ウイスキーが人気という話だったが、お金の話題があまりにも先行しすぎていると感じた。日本産ウイスキーがいつ、どのように始まったのかなどについて掘り下げが少なく、物足りなかった。家庭にあるお酒が高値で買い取られた例を紹介するだけでなく、お酒を買い占めて転売する人がいる問題も取り上げ、酒税法上、販売免許のない人がなりわいとして継続的に行くと罰則の対象になりうるといった情報も、公共放送としてしっかり発信するべきではないかと感じた。さらに、50年以上熟成された日本産ウイスキーの販売時、転売を防ぐために購入者に作文の提出を求めたり、ボトルに購入者名を彫り込む対策をしたものの、結局はオークションに出品されて高値で落札されたことも伝えており、それだけでは転売防止にはならなかったこともきちんと指摘してほしかった。個人でノンアルコール飲料を作っている話はほっこりする内容だったが、ウイスキーバブルというテーマからはかけ離れており唐突な印象を受けた。全体として表層的な印象で、話題性のある部分だけを抽出しているように思えた。大手ではないウイスキー蒸留所が増えていることや、日本産ウイスキーの特徴をきちんとした形で取材してほしかった。中国で日本産ウイスキーが偽造されていることを伝えていたが、日本国内でも海外産ウイスキーを瓶詰めして日本産と偽って販売する業者も非常に多いと聞くが、そこまできっちり放送すべきだと思う。このような背景から業界団体が日本産ウイスキーの定義を定めたが、そういった業界の大きな動きには全く触れず、お金のことに終始していたのは残念だった。
- 4月23日(金)のナビゲーション「麻醉科医が足りない～三重大学病院 汚職事件の波紋～」を見た。麻醉科医の需要が全国的にとっても増えていて、不足している実情

がよく分かった。汚職事件の動機が純粋に麻酔科医を育成する費用の捻出だけだったとは思えず、疑問に感じた。大学への寄付の見返りとして、その企業の薬品をたくさん使ったと伝えていたが、その流れは逆ではないか。薬品をたくさん使った見返りとして寄付金 flowed ののではないかと思うので、番組での解釈に非常に違和感があった。専門家は、防止するには情報公開を進めて金の流れの透明性を高めるしかないと言っていて、まさにそのとおりだとは思う。ただ、トンネル法人を使って行われている状況では透明性が高まるわけもなく、机上の空論ではないかとも思った。三重県は人口10万あたりの麻酔科医の人数が全国最下位で岐阜県は下から2番目、愛知県や静岡県も平均以下なのに対し、石川県や富山県は平均以上と伝えていたが、なぜなのか、平均以上の県はどのような取り組みをしているのかといったことも、今後、取り上げてほしい。事件の背景は分かったが、見返りの流れなど、解釈にいくつか甘い点が見られ、少し違うのではないかと感じた。

○ ナビゲーション「麻酔科医が足りない～三重大学病院 汚職事件の波紋～」を見た。タイトルだけを見ると、番組での描かれ方によっては取材先や地域医療へ大きな打撃を与えかねないと感じたが、テーマに対して丁寧に向き合い、過剰な演出のない素直な構成で好印象だった。起きた事象を表面的に捉えるだけでは、汚職や不祥事の根本的な問題は解決しないと思う。その点において、ニュースでは悪徳医師のような扱いで繰り返し報道されていたのに対し、「ナビゲーション」では国内トップレベルの麻酔科医を育成しようとしていた元教授の思いも取り上げていた。同じ人物でも、番組によって描かれ方が大きく異なることには不思議な気持ちを抱いた。汚職事件そのものを取り上げたというより、麻酔科医の不足やその実態を中心に描き、麻酔科医のニーズの高さなどについて、複数の病院を取材して生の声とともに丁寧に伝えていた。麻酔科医不足の問題を切り口に掘り下げていたので、地域医療にダメージを与える内容ではなく、事件が起きた背景の理解が深まる作りになっていたと思う。また、麻酔科医を目指す人に対してネガティブな印象を与える部分が少なかったことや、大学が寄付金をもらうこと自体は罪に当たらないことをはっきりと伝えていたこともよかった。麻酔科医不足の問題を幅広く視聴者に認識してもらい、これまで注目度が低かった麻酔科にスポットライトが当たることで、今後人材が増えていくきっかけになるとよいと思った。

○ 5月7日(金)のナビゲーション「あるスリランカ人女性の死～入管収容施設で何があったのか～」を見た。この番組がひとつのきっかけとなり、入管での収容者の扱いが社会問題化、政治問題化していったことは大きかったと思う。入管法の改正は見送られたが、改正案は在留が認められない収容者を迅速に送還させることを目的としていると思うが、収容の長期化以前に、収容者の健康管理が適切に行われていない点や、

本人の声がきちんと届いていないことが問題だと思う。出入国在留管理庁が作成した中間報告書には、病状や医師の声が反映されておらず、がく然とした。亡くなる直前の診察が外部の病院で行われ、診察したのが精神科医だった点も、いかがなものかと思った。1月から吐血や脱水症状があって電解質異常が予想される中、面会した支援者が何度も問題だと言っているのに、3か月も放置されたことに痛々しさを感じた。あってはならないことで、収容者の人権問題を問う番組だったと思う。解説者は今後の課題として、第三者機関の設置や収容対象者の見直しを挙げていたので、引き続きこの問題を取り上げてほしい。報道として価値がある番組となっておりよかった。

- ナビゲーション「あるスリランカ人女性の死」を見た。ニュースで見たときからこの事件のことは気になっていたが、こんなことが本当に起こっていたのかと改めて思った。収容施設の外観は新しくて清潔な雰囲気にもかかわらず、中で起きていたのは、今この時代に本当にあったとは信じられないようなことだった。まだすべてが明らかになってはいないが、まとまった時間を使って事件のことをよく伝えていたと思う。
- 5月10日(月)の「【よるドラ】きれいのくに(5)」を見た。整形によってほとんどの大人が同じ顔をしているという設定で大人役は限られた俳優が演じているため、整形をしていない高校生役の演技がとても映える作りになっていたと思う。SFやファンタジーのような作品で複雑な部分もあり、このあとの展開が気になっている。高校生のパパ活等の生々しい描写が話題になっており、蓮沼執太さんの音楽も作品を盛り上げていたと思う。マジョリティーとマイノリティーのどちらに属するかという容姿に対するコンプレックスや差別などに対し、かなり刺激的に取り組んでいる作品なので引き続き注目していきたい。
- 5月11日(火)のNHK地域局発 静岡スペシャル「#静岡のミライにきゅんです “買い物”でSDGs」を見た。長濱ねるさんとともに静岡県内でのSDGsの取り組みについて学ぶ内容で、慶應大学の蟹江憲史教授による解説もあり、出演者が充実していた。地域の番組を全国に向けて放送することで、全国的に影響のあるインフルエンサーや最前線の専門家が、各地の魅力を新しい視点で伝える機会が増え、地域の人にとっても各地の魅力的な取り組みを再認識することにつながるの非常好いと思った。ブランド力のある企業と連携してフェアトレード製品を企画した学生がリモート出演していたが、ゲストと対話する機会もしっかり盛り込まれていたのが印象的だった。長濱ねるさんはSNSでSDGsに関するメッセージを発信しているとのことだが、有名人による情報発信は一方的になりやすく、双方向性というSNSの特

徴が十分に発揮できないのではないかと思います。この番組では対話の機会を設けることでSNSへの呼び込も試みたのではないかと感じられ、放送局だからこそできる取り組みだと思った。中部地方の各放送局でも、若者との対話型の番組でSNSを活用したキャンペーンとの連動に取り組むことで、若者の関心をさらに高めていくことができるのではないかと。

○ NHK地域局発 静岡スペシャル「#静岡のミライにきゅんです“買い物”でSDGs」を見た。番組冒頭で、SDGsについてタレントによる呼びかけやお笑い芸人の動画、認知度の低さを伝える街角インタビューを使って紹介していたので、初心者向けの番組だと認識した。エシカル（倫理的）消費の紹介では、買い物への意欲やかける労力に男女間で大きな差があるように感じる部分があり、出演者のほとんどが女性だったこともあって、女性目線の番組なのだろうかと思った。手提げバックの材料であるジュートの説明があまりなかったのが調べてところ、高い生分解性で環境に優しく、生産地である発展途上国と対等な立場で取り引きされているフェアトレード商品ということだった。そういった点もきちんと説明した方がよかったのではないかと。エシカル消費が大切なのはもちろんだが、現状では新型コロナウイルスに関連した応援消費のほうがさらに優先度が高いのではないかと考えた。業種を問わず地域の施設や店舗に野菜の定期配送を行う「やさいバス」を紹介する際に出た、物がどこから来てどこへ行き、最終的にどのように捨てられるのかは非常に大事な視点だと思う。これまでも地産地消が推奨されてきたが、静岡県の生産物の7割が県外に出てしまうということで、消費する側の地産地消への意識が追いついていないことの表れのように感じた。全体としては、初心者向けとはいえ、消費者意識の啓発という意味では内容が少し薄かったと思う。SDGsのゴールは解釈が難しく、必達目標という見方や希望的な到達イメージくらいの緩いとらえ方もある。また、その裏側には国際的な金融経済の思惑などがあるとも言われているので、今回のような地方での取り組みを取り上げた初心者向けの番組だけでなく、大きな視点でさらに踏み込んだ番組も制作してほしい。

○ 5月13日(木)の所さん！大変ですよ「一流シェフが自宅に！料理人の新しい働き方」を見た。新型コロナウイルス感染拡大防止策によって飲食業界は特に大変で、料理人も苦境に立たされている。そんな中、各家庭の台所で調理する出張シェフの需要が高まっているとのことで、採用試験の様子が紹介されていた。店舗と比べると一般家庭の台所はスペースが限られ調理器具も小さく、時間内に決まった品数を作ることができなかった。調味料も間違ってしまったが味付けはよく、献立の組み合わせや清潔感も高評価で見事合格していた。一つの店舗で、すし、フレンチ、イタリアンの料理人3人が同じキッチンを共有している事例も紹介されていた。客に名刺を出し

てあいさつしたり、SNSで料理を発信したりと大変な努力をしていた。酒類を提供する店に休業要請が出され、外食に行きづらくなり、飲食業界にはつらい日々が続いている。一日も早い新型コロナウイルスの感染拡大の終息を願うばかりだ。

○ 5月16日(日)のNHKスペシャル「ビジョンハッカー～世界をアップデートする若者たち～」を見た。社会問題の根本的な解決に取り組むビジョンハッカーがSNSでビジョンを掲げると、あっという間に共感者が集まり大きなムーブメントになっていた。私たちの世代ではあまり実感がないかもしれないが、それが大きなうねりになって課題の解決にとどまらず、課題を生み出すシステムまで変えていく動きはすごいと思った。貧困の連鎖が起こっている社会を変えたいと考えた青年がビジョンを掲げたところ、多くの人たちが衝撃を受け、社会をよくしたいという情熱がどんどん集まっていたが、こういった行動力はまさに若者のパワーだと思った。ほかにも、働く人すべてが正当に報われる社会の実現を目指す人や、貧しい人たちが自立できるようにスラム街で社会システムを考える人など、さまざまな20代、30代が紹介されていた。新型コロナウイルスで大変な世の中になっている中、よりよい社会のために行動する人たちを応援したり、自分にもできることをしていきたいという気持ちになった。

○ 「【土曜ドラマ】今ここにある危機とぼくの好感度について」を見た。出演者からナレーションまで、よくこれだけ実力のある俳優陣をそろえられたものだと感心した。国立大学の内部事情や、不祥事の際にどのように対応するかなど体質的な部分を描いていて、かなり骨太なドラマだと思う。最近では新型コロナウイルスのクラスターやハラスメントなどの問題で大学に対する負のイメージが強くなっているが、教育面だけではなく大学運営の厳しさや研究員不足、教員のポストの不安定さなど、深く重いテーマをユーモアを交えてシニカルに描いており、そのバランスが秀逸だと思った。かなり専門的な内容や用語が出てくるため、視聴者はすべて理解できるのだろうかと感じる場面もあるが、非常に楽しく番組を見ている。

○ 4月5日(月)、12日(月)、19日(月)、26日(月)の「100分de名著 渋沢栄一“論語と算盤”」を見た。この番組は時世に合わせた本の選択がすばらしく、特に新型コロナウイルスの感染が拡大したあとは、マルクスの「資本論」、ミヒャエル・エンデの「モモ」、ピエール・ブルデューの「ディスタンクシオン」など、立て続けにすばらしい作品を取り上げていた。講師によってもクオリティーが左右される番組だと思うが、今回の守屋淳さんは丁寧な伝え方で、とても分かりやすかった。伊集院光さんも現代社会と本の内容が呼応しているといったコメントをしており、思わずうなってしまうほどだった。「100分de名著」のSNS公式アカウントが、番組と関連するオンライン講座を守屋さんが担当すると投稿していて、興味を持った。番組コンテン

ツを横方向に展開させたり、立体的な構造を持たせることは、うまく行わないと難しい。番組動画をSNSにも活用するといった横方向への展開はよくあるが、オンライン講座であれば立体的になり、さらに深掘りできる形式だと思うので、おもしろい展開だと感じた。福井放送局でも、福井県が取り上げられた全国放送の番組を深掘りするような地域向け番組を放送していて、おもしろいと思っている。一つの番組を違う観点からもう一度見ることで再生産が起きる手法であり、メディアコンテンツとしてはおもしろい展開がなされていると思う。単に情報発信という側面で複数メディアを使い分けるのではなく、いかにして付加価値のあるコンテンツとして深めるかを考えながら展開していくほうが、よりNHKらしいのではないかと感じた。残念だったのは、「100分de名著」のホームページにオンライン講座のページへのリンクが無かったことで、興味があるにも関わらず情報にリーチできない人が出てきてしまうのではないかと思った。

- 「グレートトラバース3 15min.」では、田中陽希さんの前方や後方、頭上から走る姿を追従したり追い越したりしながら撮影しており、スタッフの体力や登山技術の高さが冒険をうまく演出していると思った。撮影スタッフの装備や技術も一度見てみたいと感じた。現在は最初のシリーズである「グレートトラバース」が放送されているので、番組初期から今に至るまでの推移や冒険の原点が見られてとてもよいと思う。山に登る体力や縁の無い人にも勇気を与えるような番組で、彼の冒険をみんなで応援するのはよいことだと思った。「グレートトラバース」では噴火前の御嶽山に登り、「グレートトラバース3」では噴火後に犠牲者を追悼していた姿には、非常に感慨深いものがあった。
- 「YOASOBIとつくる未来のうた」は「共に生きる」をテーマに若者から物語を募集し、グランプリ作品を基にYOASOBIが番組の歌を作る取り組み。注目の音楽ユニットが歌を作ることで若者の参加を促すことができ、非常によいと思った。また、「共に生きる」というテーマについて考える機会にもなり、番組と連動して若者が参加できる仕組みは非常にすばらしいと感じた。SDGs関連の番組を最近よく見かけるが、NHKのキャンペーンは番組の要素を作る段階から若者を巻き込んだ企画が多く、とても意義のあることだと思う。今後さらに自治体や教育機関などとの連携を強化することで、番組を作りはじめるところから放送後まで長期間にわたって地域への広がりも生まれ、公共放送としての意義や番組の価値がより高まるのではないか。

NHK名古屋拠点放送局
番組審議会事務局

2021年4月NHK中部地方放送番組審議会

4月のNHK中部地方放送番組審議会は、15日(木)、NHK名古屋拠点放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「“同居孤独死” 親の死に気づかない」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	松田 裕子	(三重大学学長補佐)
副委員長	坂田 守史	((株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役)
委員	稲垣 貴彦	(若鶴酒造(株)取締役)
	遠藤 英俊	(名城大学特任教授)
	岡安 大助	(中日新聞社取締役)
	榊原 陽子	((株)マザーリーフ代表取締役)
	玉井 博祐	(能楽師/玉井屋本舗社長)
	成島 洋子	((公財)静岡県舞台芸術センター芸術局長)
	平本督太郎	(金沢工業大学SDGs推進センター長)
	廣田 憲吾	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	安井 香一	(東邦ガス(株)代表取締役会長)

(主な発言)

<ナビゲーション「“同居孤独死” 親の死に気づかない

(総合 4月2日(金)放送) について>

- 番組ではある一つの事件について、親の遺体を放置した男性の子ども時代から、両親の離婚や父親との暮らしぶり、近隣住民の反応といったさまざまな角度から丁寧に伝え、問題を投げかけていたのでとてもよかった。家族を保護する責任はあるが、単に置かれた環境の問題だけではなく、助けを求める心や時間のゆとり、きっかけを失っている人が多くいるのが現実だと思う。番組では、助けを求めるべきというメッセージを発信しつつ、周囲の関わり方や家族の死とどう向き合うかのヒントとなる内容も伝えていてよかった。ただ、遺体を放置した男性自身の複雑な思いは伝えていたが、亡くなった父親の生前の思いまでは知る事ができず残念だった。日記でも残していれば、家族への思いが何か書かれていたかもしれないと思った。親を弔うということは、

悔やみ、悲しみながらも感謝し、いずれ訪れる自分の死を親の死に重ねて、そこから生きる力をもらうということだと思ふ。子どもが自立すれば親子の時間は短くなり親の死に目に会える人は少ないと思ふので、誰にもみとられず死ぬことが不幸だとは決して言えないのではないかと思つた。番組を見て、ふだんから周囲に感謝の気持ちを伝えておきたいと思つた。疎遠だったとしても、死別して初めて、生前のことばや記憶がよみがえり、残された人の心の中で生き続けるのが家族だと思ふ。そう考えると、生前の父親の言動は息子の中で生き続け、事件を背負いながら親の死と改めて向き合っていくことが息子の人生だと思つた。

○ 取材を受けた男性は、幼少期に家族でキャンプや映画に出かけ、学生時代に1人暮らしを始めるなどごく普通の人物で、どこにでもありうる事例だと思つた。父親の病気を機に同居を始めたことはすばらしく、体が弱らないように、身の回りの世話は自分でするよう取り決め、仕事を探すよう促したという話ももつとも感じた。ただ、彼は、誰でも年を取ることを想定していなかったのではないか。せめて一緒にご飯を食べる機会が少しでもあれば、父親の変化に気付いたり、もう少し優しくできたのではないか。親はいつまでも元気だと思いたいものなので致し方ない部分もあり、それを親子関係が希薄だと表現してよいものかと感じた。ドラッグストアの店長だった男性は、新型コロナウイルスの感染拡大によって仕事が多忙を極め、責任ある役職に就いていたこともあり、不幸が重なってしまったのだと思ふ。ただ、亡くなったことに気付いたとき、なぜ姉に相談できなかつたのかと非常に悔やまれた。声をかけてくれる人の存在も必要だったのではないか。誰にでも起こりうることなので、社会全体で考えなければならない問題だと思つた。

○ どこにでもいる親子2人の普通の家庭で起きており、とても大きな衝撃を受けた。あまりに気の毒な内容で、構成などを気にする余裕もなく心を痛めながら見た。2か月もの間、父親が亡くなったことに本当に全く気付かなかつたと話していたことや、「心をシャットダウンしていた」ということばが印象的だつた。これまでつらいときに繰り返し心を閉ざして生きてきた人が、ここでもまたそうしてしまつたのかと思つた。ストレスの多い社会では、自分の心を守るためにシャットダウンも大切といった考え方があり、新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、その傾向が強くなっているかもしれないと、この事件を通じて感じた。しかし、感情をシャットダウンし続けることは不可能で、いずれ心が壊れてしまうと思ふ。一方、つらい思いや感情を受け止めるのにも、ものすごく大きなエネルギーが必要で、そのエネルギーを失っている人や、自然や人との関りを通じて生み出せない人が増えているのではないか。一番身近な親との関わりでもエネルギーを貯めるどころか、かえって消耗させていたとすると、どう解決したらよいのか非常に考えさせられた。生前通つていた喫茶店の従業員

員が異変に気付いていたのはすばらしい観察力だが、こういったことをどう支援につなげられるかも考える必要があると思った。同居していたにも関わらず親を孤独死させてしまった罪悪感を想像するのは難しいが、親子や家族など親しい人との関係性を考えるきっかけになるとてもよい番組だった。

- 非常にすぐれた内容で、社会に重い問いを投げかけるよい番組だった。去年、同居孤独死で逮捕された事件はNHKが報じただけで27件あり、そこに着目して取材を始めた感性はとてもすばらしいと思う。そのうち9件は仕事をしながらの同居とのことだったが、同居孤独死と聞くと、社会と接点のない人が起こしてしまうのではないかと想像していたので、残りの18件はどういうケースだったのか少しでも触れてほしかった。実際の映像がほとんど無いというテレビにとって伝えづらい題材だったと思うが、本人のインタビュー映像や再現イラスト、イメージ映像をうまく活用していたと思う。また、スタッフが取材や議論をしている映像を使いながら、取材の過程や見えてきた事実を伝えるなど、さまざまな工夫がされていたと思う。実際に住んでいた部屋の障子の染みや天井の剥げた跡など、かなりリアリティーを感じる映像があったので、重い内容でも最後まで見続けられる作りになっていた。父親が通っていた喫茶店の従業員が、生前の様子を語っていたのも非常に印象的だった。番組の大半が遺体を放置した男性のことばでつぶられていたが、勤務していたドラッグストアの同僚や客から、男性の評判や人柄について聞くことができれば、立体的に人物像が浮かび上がり、さらによくなったのではないかと感じた。父親が亡くなっていることに気付いたあと、捕まることを恐れて放置するに至った心の動きについて専門家に解説してほしかった。
- 周りに迷惑をかけたくないという意識から助けを求められず、仕事にも追われて余裕を失い、最終的にはすべてのことに無感覚になってしまうという現代の社会状況を明らかにしているように感じた。最終的に、親の死という非常に重要な出来事に関しても正常な反応ができないほど無感覚になっていく状況が克明に描写されていた。仕事をしている社会人がこのような状況に陥ったことに大きな衝撃を受けた。社会全体として支え合う意識が希薄になり、過度の自己責任論と他者への無関心が広がる中、高齢の親を息子1人に押しつけたことが悲劇につながったのではないかと感じた。職場や行政、地域のコミュニティや親族が関心やつながりを持ち、緩やかなセーフティネットのようなものができれば、安心して暮らせる社会になると思う。同居孤独死が起こった家庭では、家族関係にどのような傾向があったのかがデータで示されておらず、ややストーリー先行と取られかねないのではないかと感じた。視聴者に、特殊なケースであり、自分とは関係のないものと思われたくないという意図は分かるが、だからこそ傾向の分かるデータがあれば、より現実的な問題として感じられたのではないかと感じた。2か月間も気付かなかったということだが、生活費や光熱費などはどうしていたのか、金

銭面で全く接点なく生活することはできないのではないかと疑問が残った。実際に親子が暮らしていた家の様子が非常にリアルな映像で繰り返し映し出されたので、夕食時に見るにはつらく感じる部分があった。

- 同居孤独死が27件あったということだが、国内の新型コロナウイルスによる死者が1万人に迫ろうという中で、その規模の違いを考えると、なぜ今この話題を取り上げたのかと思った。このテーマが社会全体の問題と言えるのか少々疑問に感じた。同居していてもみとられることなく亡くなり、朝になって発見されることはよくあると思う。今回の事例とは何が違うのかと考えたが、2か月も気付かなかったことや放置した理由などは想像の域を越えていて理解できなかった。番組からは、孤独死そのものが問題なのか、遺体を放置したことが問題なのか判然としなかった。今回は一例を示しただけだったが、視聴者に問題意識を持たせ何らかの方向性を見出してもらうのがねらいだとすれば、27件の当事者が置かれた社会的背景や個人的傾向など、もっと全体的な情報を伝える必要があったのではないか。最後のまとめとして、社会全体の問題であるとか、核家族社会の価値観の弊害であるといった結論に無理やりつなげなかったのはよかったと思う。金曜の夜は週末に向けてリラックスしたい時間帯なので、こういった重い社会派の番組を見続けるのは大変だと感じた。

(NHK側)

同居孤独死をどう捉えるべきかがこの番組の核であり、悩み続けながら制作した。同じ内容を取り上げた「クローズアップ現代+」では作家の重松清さんに読み解いてもらったが、1つ屋根の下に1人暮らしが2つあっただけだという表現をしていた。親子の生活リズムが異なることですれ違ってしまうのは誰にでも起こりうるとも言っていて、そのとおりに思った。また、シャットダウンについては、追い込まれると考えることをやめてしまおうとする人もいて、その延長線上で、一番してはいけない場面でシャットダウンしてしまったのではないかと言っていた。本来は心を安定させるためのものかもしれないが、殺伐とした世の中で考えることや人間関係などをシャットダウンして、社会からどんどん孤立していったことが、事件につながったのかもしれない。番組には視聴者からさまざまな反応があり、自分にいつ起きてもおかしくないと思ったという声も多かったので継続して取材していきたい。

- 残酷かつ悲しい事件で、なぜこのようなことが起きてしまったのか疑問に感じた。保護責任を放棄して遺体を放置することは犯罪だが、助けを求めれば援助が受けられたにも関わらず、それができずに援助の網の目からこぼれ落ちてしまった例だと思っ

た。国は地域包括ケアシステムの実現に向けて、高齢者が施設ではなくなるべく自宅で最期まで暮らすことを推奨しているが、今回の例では、どこかの時点で支援を求め、施設で保護するなどの対応ができたのではないだろうか。支援を担う人々が、助けを求める声を拾いに行けないという課題があり、父親と息子の2人で住んでいたために支援の対象から外れてしまったという問題もあるように思えた。現在、親子で同居し食事などを共にしながら生活する家庭が少なくなりつつある。一方で、親の面倒は子どもが見なければいけないという法律や風習は残っていて、面倒を見られない人たちを悩ませている。今後このような問題を、法律や倫理の観点でどう解決するかが課題だと感じた。今回の事件は珍しいケースだと思うが、孤独死に至る根底には、親子関係の希薄さやコミュニケーション不足があり、今後どうしていきべきか問いかける番組だった。

- 遺体を放置した男性の映像表現が、殺人犯を扱う際の表現に近いように感じられて不快だった。不安をあおるような暗い裁判のイラスト。「この人が長い間父親の遺体と暮らしていたとは信じられなかった」という意図が伝わりにくいコメント。Aさんなどの仮名ではなく「父親の遺体を放置した男性」というテロップ。インタビューの際のブルーで暗い照明。いずれも、男性の印象を過剰に悪くしてしまっていたように感じた。また、家族の状況を伝えていたCGも、事件や事故を扱う際によく使われるものだったように思う。親の転職や離婚が、何か悪いことのように伝わりかねないと感じた。こうした表現には制作者の意図が入っているようにも見え、本当に放送していいのか、男性自身がこの番組を見たらかなりのショックを受けるのではないかと思った。同居孤独死という問題には社会的背景があると伝えながらも、客観的な視点や専門家のコメントなどがなく、視聴者に不安だけを与える内容になっていた。男性個人の心理的な状況や背景は分かったが、なぜそのような状況で人間は心を閉ざしてしまうのかという専門家のコメントなどがあれば、視聴者が受ける男性の印象を変えることができたのではないだろうか。「クローズアップ現代+」でも同じ内容を取り上げていたが、男性に対する表現のしかたが異なっており、「ナビゲーション」における表現は適切だったのかと強く批判したい。
- 同居孤独死をよく知らなかったので学びがある内容だった。亡くなる時に居合わせなかったことや、仕事やストレスなどいくつもの要因が重なり合い事件につながってしまったことが分かった。また、それぞれの要因は誰にでも起こりうる事象であるということも納得できた。自分が壊れてしまう前に心を閉ざさざるを得ないという状況は社会に数多く存在しており、ひと事ではないと感じた。企業や学校では、周囲がカウンセリングを受けさせることで困難な状況の打破につながることもあるが、その仕組みが世の中全体に浸透しきっていないため、このような深刻な問題が起きるのだと

思った。実際に取材を行った記者が出演していたのは非常によかったが、専門家による打開策につながる解説を加えると、より洗練された内容になると思った。また、別の事例をスタジオで紹介する際にイメージ映像を使っていたが、説明を聞けばよいのか映像を見ればよいのか分かりにくく、かえって理解を妨げていたので、パネルによる解説のほうがよかったのではないか。番組の締めくくりに「1つの声かけ、1本の電話、1通のメールが心の距離を縮める」と伝えていたが、周囲とのコミュニケーションを断絶せざるを得ない状況にまで追い込まれてしまった人は自力で意識や行動を変えることが難しいと思う。追い込まれた人の立場を理解したうえで発言すべきであり残念だった。それに対し、「クローズアップ現代+」では、作家の重松清さんの「家族は大切だけど万能ではない、頼りにできる手すりになる存在があれば安心して暮らせる」というコメントを取り上げ「勇気を持って声をかける姿勢が大事だ」と伝えていた。まとめ方が難しいテーマだからこそ「ナビゲーション」でも、有識者からのコメントを紹介するなど、視聴者の理解につながるような番組の締め方が必要だったのではないか。

- 社会とのつながりを持ち、親と同居していても孤独死はありえるということで、遺体を放置した男性について幼少期にまでさかのぼり丁寧に取材し伝えていたと思う。ただ、親が亡くなって数日後に気付かず通報した別の事例では罪に問われなかったとあり、2か月遺体を放置した男性の事例は、放置した期間の長さが罪になったのか、気付いたときにすぐ通報すれば罪にならなかったのか、何が罪にあたるのかよく分からなかった。思考停止に陥ってしまっていた時点で異常な状況であり、事件の発覚を恐れて自殺さえ考えるほど悲惨な心境にあったのだと感じた。親の耳が遠くて会話が無くなっていた別の事例からは、コミュニケーションが取れないときの対処法など具体的な方策を示すところまで踏み込んでほしかった。また、誰にも知らせずに吊りたいという考え方もあり、みんなに囲まれて吊られることこそが幸せだという考えに、とらわれすぎないようにしたいと思った。
- 非常に暗くて重いテーマだと感じた。2つの事例のうちほぼ1つの事例だけを取り上げた理由を明確にしてほしかった。また、27件の事例のうち逮捕者が仕事をしていたのは9件で、その多くが50代の働き盛りだったと伝えていたが、映像で紹介していたリストには「無職」という文字が並んでいたため誤解を招きかねないと感じた。社会的な背景をきちんと示した上であの事件を取り上げる意味を明確にすれば、もっと番組の内容を理解しやすかったのではないか。親が亡くなっていることに本当に気付いていなかったのか真相は分からないが、映像表現によって印象を操作しているようにも感じられ、危険ではないかと思った。「同居孤独死」というタイトルだったが、どちらかと言えば家庭内別居に近く、死に目に立ち会えなかったことよりも遺体を放

置したことに問題があると思うので、違和感があった。亡くなったことに気付かなかった期間の長さとその原因、さらに気付いたあとに放置してしまったことが一番の問題だったはずだが、様々な状況を見せられることで、かえって焦点がぼやけてしまったように思う。気付いた時点で通報せず、臭いを消すために芳香剤を置いてまで遺体を放置していた様子には、心の闇を感じた。人は自分の幸福を最大化するために選択をして生きていると思うが、男性が親の遺体を放置するのが最適だと考え、それを選択してしまう社会とは何なのだろうと思った。問題提起をするのであれば、相談できる相手がない人や社会的に孤立している人、経済的に困窮している人に向け、まずどこへ連絡すべきかや、葬儀など費用負担が難しい場合の支援など、役に立つ情報も合わせて伝えてほしかった。「子から親へ声かけや電話をしてください」と言っていたが、そもそも家族関係がうまくいっていない人はどうすればよいのか、誰に相談すればよいのかといったことを伝えるべきだった。

(NHK側)

家族が亡くなっても気付かなかった事例の約4割で家族関係が希薄化していたという調査結果もある。そのような家族に何を支援すべきかや、すべてを支援しきれない社会になったときにどうすべきか、今後も考えていきたい。「クローズアップ現代+」では、家族が自宅で亡くなっていたときの連絡先や葬儀代が経済的に負担できない場合の支援などについて、番組と連動してSNSを活用し伝えた。「ナビゲーション」でも具体的に役立つ情報を紹介していきたいと思う。映像表現については大変厳しい指摘だと思っている。今回はCGや照明が番組の印象に大きく影響してしまったのかもしれない。指摘は制作担当者間で共有し、今後十分に気を付けたい。同居孤独死にはさまざまな背景や要因があるので、どのような形で伝えていくべきか考えながら、今後も継続して取材を進めていきたい。

<放送番組一般について>

- 3月19日(金)の「NHK静岡開局90年 静岡にきゅんです スペシャル」(総合 後7:30~8:42 静岡県域)を見た。開局90年ということで「静岡にきゅんです」をキャッチフレーズに1年間継続して取り組んでいくキャンペーンのうち、最初の特集番組だった。静岡放送局の制作スタッフの顔が見える作り方になっていてよかったと思う。静岡県出身のタレントの出演もよかったが、スタッフみずから自転車に乗って出かけたり、SNSに集まったメッセージを紹介したりと頑張る姿が見え、とてもよかった。きゅんなスポットの紹介というのでマイクロツーリズムの番組かと思った

ら、個人の記憶や思い出にまつわる場所を発表するような内容だった。部外者が入れない場所や小さな喫茶店も紹介されていて、地元の人のための地元紹介という感じだった。SNSでは「知ってる」など共感するメッセージが届いていて、視聴者も、自分に関わりがあると強く感じられる番組だったと思う。長時間だったが最後まで飽きずに見られた。今後の関連番組も引き続き見ていきたい。

- 3月19日(金)の「ド真ん中ジャーナル！」(総合 後7:57~8:40 東海3県ブロック)を見た。新型コロナウイルスのワクチン接種の具体的な流れを接種会場から生中継で伝えており、大変分かりやすいレポートだった。司会の井戸田潤さんのコメントにはむだがなく、進行もよかった。リモートでの出演者も含め、全員の表情がうまく伝わるモニターの配置や画面構成になってよかった。専門医の中山久仁子さんからの妊婦や基礎疾患のある人へのアドバイスは分かりやすく、視聴者の疑問にも的確に答えていて、とてもよかった。番組スタッフが映り込んでしまうハプニングがあったが、生放送ならではの活気が伝わったので好意的に捉えた。また、外来生物の被害を取り上げていたが、愛知県は「生物多様性戦略 2030」を策定しており、外来種の一覧をホームページで公開している。非常に種類が多く、意外な生物も含まれる驚くような内容なので、今後、番組でも紹介してほしい。
- 3月24日(水)の必修！マウンティング会話講座「J世代の巻」(総合 後10:45~11:15)を見た。マウンティングは無いほうがよいのに、その会話講座とはどういう内容なのだろうかと思いながら見た。J世代という25歳前後の若者たちが、マウンティングにならないよう気をつけながらもいかに自分のことを伝えるか、とても工夫しながら会話していることを紹介していた。出演者がかわいいお化けのイラストになっていたのも、本音を話しやすそうに見え、また、生々しい発言でも視聴者が受け止めやすくなっているように感じた。若者に人気がある、仮想のCGキャラクターを使った投稿動画のよさをうまく組み込んだ演出になっていたと思う。会話のネタを探すために相手のSNSを確認し、ぎすぎすした雰囲気や修復するためにその情報を使うなど、若者どうしの会話の実態を知ることができたのもよかった。今後もさまざまなテーマを取り上げてほしい。
- 4月9日(金)のナビゲーション「ワクチン接種の“ギモン”に答えます」(総合 後7:33~7:58 中部ブロック)を見た。「ド真ん中ジャーナル！」と重なる部分もあったが、大事な内容なので、情報を随時更新して伝えることが重要だと思う。ワクチン接種が進んだ際には、改めて最新の情報を伝えてほしい。中山医師の落ち着いた説明も非常によかった。ただ、真面目な内容なのに、冒頭のナレーションやアナウンサーの話し方が軽々しく感じられ、ふさわしくないと思った。そのあとは内容に合った雰囲気

なっていったので、放送前に番組全体のトーンを確認したほうがよいのではないかと思った。「ナビゲーション」は明るい話題から深刻な話題までさまざまなテーマを取り扱っているので、テーマごとにカテゴリライズしてそれぞれに合ったトーンや編集のあり方を整理し、制作関係者で共有すれば、もっとよい番組になると思う。今後に期待したい。

- ナビゲーション「ワクチン接種の“ギモン”に答えます」は、高齢者を対象にしたワクチン接種が始まる時期なので放送のタイミングもよく、とても分かりやすい内容だった。接種の模擬訓練に参加した人が、地域の人にその内容を説明している様子は大変参考になった。ワクチン接種に対する不安や、予約を自分でできるかといったことなどは人によって大きな差があるが、この番組では高齢者にも分かりやすく、具体的に使える情報を映像で伝えていた。今回は軽快な雰囲気、山田アナウンサーの持ち味である明るさが生かされていたと思う。キャスターが番組の印象を作っている部分が大きいと思うので、適材適所でその人の持ち味が生きるような番組づくりができればよいと感じた。中山医師はやわらかい表情で滑らかに話していたので、非常に信頼でき安心して見ることができた。とてもよい人選だったと思う。ワクチンを接種した数日後、人によっては仕事に支障をきたすほどの副反応も出ているので、これからも最新の情報を繰り返し放送してほしい。番組の最後に「ワクチンを打っても油断や安心をせず、マスクや手洗いといった基本的な対策もしっかりするように」とまとめているが、番組の内容やテーマに合っていないと感じた。
- 4月10日(土)のNHKスペシャル「池江璃花子 新たな挑戦」を見た。2年前から白血病と闘って寛解に至ったが、現在も服薬を続けているとのことだった。過呼吸になってしまうほどのストレスを抱えながらも、こつこつと練習を積み重ねてきたことが分かる内容だった。飛び込みもできないほど筋力が低下した状態からの復帰で、その頑張りにとっても胸を打たれた。2024年のパリオリンピックを目指していたが、東京オリンピックが1年延期になり彼女にもチャンスが巡ってきて、運も味方にしたのだと思った。「努力は必ず報われる」ということばに胸を打たれ、どん底からいかにしてはい上がれるのか、学ぶところが多かった。しかし、生放送のインタビューからは、なぜ復帰できたのかまではよく分からず不満を感じた。人生との向き合い方がどう変わったのか、どのようにして前向きになれたのかなど、復活の背景にあるものをもっと深掘りしてほしい。
- 4月11日(日)の目撃！にっぽん「苦手なことは、可能性だ～“教えない授業” 半年間の記録～」を見た。先生はちょっとしたヒントを与えるだけで、子どもたちが自分でどんどん考えていくという授業を紹介していた。この学校の先生が東日本大震災

のあとに福島を訪れた際、子どもたちが10年後、20年後の福島の将来を語り合っているのを見て、東京にいる自分の教え子たちはどうなのか、10年後の東京や日本を語れるのだろうかと感じてこの授業を発案したという。番組では、誰かが手を挙げて意見を発表するのではなく、いくつかの小さなグループに分かれてしゃべり合っていたら、どんどんアイデアが出てくるといった様子を紹介していて、子どもたちの成長する姿をよく伝えていた。この授業は、社会で起きるさまざまな問題の答えは1つではなく、対話の中からいろいろなことが生まれてくる、今の授業は一方的に教師が指導するだけで子どもたちの対話を促進できていないのではないかという問題意識から始まった。学校では多数決がよくあるそうだが、本来は対話をし、少数意見を尊重するからこそその多数決だったはずだが、そういった大切なことが抜け落ちてしまっているのではないかということ問いかけていて、とてもおもしろかった。教育関係者にぜひ見てもらいたいと思った。

- 4月11日(日)の小さな旅「春ひらく～静岡県 富士宮市～」を見た。プロパグライダーの女性と父の遺志を継いでワサビを作り続ける男性が取り上げられていて、彼らが地域の中で支えられていることが分かる爽やかなよい番組だった。富士山に向かって飛び立つ映像は圧巻で、このような景色の中で飛んだときの爽快な気分が想像でき、とてもよかった。音楽やナレーションが日曜朝の時間帯に合っていて、落ち着く番組だった。新型コロナウイルスの影響で出かけることが難しい状況の中、とても爽やかな気分になれる番組だった。

- 4月12日(月)の逆転人生「電光石火！コロナ禍で売上ゼロからの逆転」では、各地のアクティビティを仲介する企業が、新型コロナウイルスによって大打撃を受けたものの、約100人いる従業員の雇用を維持するという目標を掲げてまい進する様子が情熱的に描かれていた。出演者が「自分だったら社員を見捨てて自分だけ助かる」と言っており、会社経営を全く理解していない少し的外れな発言で内容にそぐわないと感じた。新型コロナウイルスの影響で失業した人が非常に多くいる中で、ビジネスに無理解な芸能人を起用してバラエティー色を強くする必要はあるのか、非常に強い違和感を覚えた。また、売り上げの推移を示すグラフの単位がなぜかパーセントになっていて、しかも起点が200%でどの時点を100%としているのかも分からなかった。インパクトを出したくてそうしたのかもしれないが、数値を正確に伝えることを重視すべきではないかと感じた。売り上げ低迷期における試行錯誤や、ビジネスモデルの革新につながるシステムを短期間で開発するなど、復活を果たすまでの流れが、関係者のコメントによってリアルに描写されていた。一方、ユーザー側の視点が欠けていて、これからの観光のあり方がどのように変わっていくのかを感じとることはできなかった。従来のレジャーは売り手の論理が強く、客を長時間並ばせ、過剰な人数を押

し込んできた面があり、観光客自身もそれを当たり前だと思っていたが、ポストコロナではもっと利用する側に寄り添ったものに変わるのではないかと感じた。開発されたシステムによって、今までと違ってゆったり楽しめたという観光客の反応を取り上げれば、時代の変化も感じられたのではないか。

- 4月13日(火)のクローズアップ現代+「“同居孤独死”親の死に子どもが気づかず…各地で」を見た。「ナビゲーション」では、なぜ事件が発覚したのか疑問だったが、姉による警察への通報があったからだと分かった。遺体を放置した男性が自殺を決意し、姉に謝罪のメールを送ったことで通報され、自殺しようとする途中で逮捕されたと知った。最終的に男性は、家族によって救われたのだと思うと、つらい事件の中にも救いがあったような気がした。「ナビゲーション」からブラッシュアップされていて、作家の重松清さんのコメントにより深みが出ており、さらに考えさせられた。
- クローズアップ現代+「“同居孤独死”親の死に子どもが気づかず…各地で」では、男性が自殺しようとしたとき姉に「ごめんなさい」とメールを打っていたり、男性は責任感が強く自分にしかできない仕事を終えてから死のうとしていたことを伝えていたが、なぜ同じ題材を扱っていた「ナビゲーション」では取り上げなかったのか。2つの番組で情報の切り取り方にずいぶん違いがあり、伝え方でこんなにも印象が変わってしまうのかと思った。また「クローズアップ現代+」では、データによってある種の客観性が示されていたし、作家の重松清さんのコメントは視聴者に自分だったらどうしたかを考えるきっかけになっていたと思う。「ナビゲーション」と「クローズアップ現代+」との違いは、視聴者の目線、見る人がどのように感じるかという視点の違いだったのではないか。「クローズアップ現代+」からは、人にどのように寄り添うか、尊厳をいかに大切にすることといった姿勢を感じる事ができた。社会問題は提起すればよいというものではなく、それを受け取る人間がいるということ強く意識して番組を作るべきではないかと感じた。
- 4月14日(水)のグレートトラバース 15min. 百名山一筆書き踏破への道「天城山」を見た。田中陽希さんが日本全国、百名山の人力踏破に挑んでいる姿を放送していた。津軽海峡をカヤックで渡るなどすごい内容で、自分も一緒にアドベンチャーをしている気分になれる、とても楽しい番組だと思った。
- 4月11日(日)の日曜美術館「生中継!“鳥獣戯画展”スペシャル内覧会」を見た。教科書に出てくる有名な絵巻物だが、思っていたより実物はとても小さく見えた。「甲」の巻物にある猿とかえるが擬人化された部分が有名だが、ほかにも多くの絵を見ることができた。「乙」にはさまざまな動物がリアルに描かれており、馬や牛といった当時

の日本でも目にしていた動物だけではなく、仏教と共に大陸から伝わったものか、竜やばくといった空想上の動物も描かれていた。今見ても違和感のない、狩野派などに通じる図案が墨の濃淡で表現されていた。「丙」には囲碁やすごろくのほか、今では見られなくなった耳引きや犬合わせなどを楽しむ人たちが描かれていた。みんな痩せていて、当時は裕福な社会ではなかったことも伝わってきた。最後は動物の風刺絵に戻り、祭りなどを楽しむ姿に続いて、かえるとその天敵である蛇で終わっていて、「楽しいことばかりではないよ」と伝えているように感じた。東京国立博物館では初の試みとして、一定のスピードで見てもらうために動く歩道を導入していた。少し速いとも感じたが、混雑を避けつつ大勢の人を満足させられるのですばらしいと思った。また、鳥獣戯画を音楽で表現したり、アニメと捉えて解説を加えるなど、会場では味わえない独自の見せ方をされていて見応えがあった。

- 4月11日(日)のサイエンスZERO「宇宙新時代 H3ロケットはここまで来た！」を見た。日本では約30年ぶりとなるロケットの新規開発を伝えていた。H3ロケットは従来型よりも大きく、シンプルで量産できることをコンセプトに開発しており、新型エンジンのパワーは1.4倍もありながら部品数は3分の1に抑えられており、打ち上げコストもこれまでの半分程度にすることを目指していると分かった。エンジンに採用されている日本独自のシステム、エキスパンダー・ブリードサイクルの説明が非常に分かりやすかった。事前のシミュレーションの精度が上がっているとはいえ、実際にはさまざまな問題が発生していた。30年も途絶えていた、現場の技術者の育成も意識しながら、それらの問題を解決していくプロセスには大変感心した。組み立て工程でトラブルが発生した場面では、重量物に直接触れたり素手で作業したりしており、緊迫感は伝わるものの、安全面という観点からこのような映像を流すのはいかがなものかと感じた。全体的にしっかり取材されており、構成も理路整然としていたと思う。将来の安全保障のためにも、自立した宇宙への輸送手段が日本にも必要であり、宇宙開発を進める意義が大変分かりやすく伝えられていた。

NHK名古屋拠点放送局
番組審議会事務局